

2021 年秋全国大会（大阪経済大学）の記録

大阪経済大学 高橋亘

2021 年秋の日本金融学会全国大会は、大阪経済大学が主催校となった。実動会員は、4 名程度しかおらず開催をお引き受けするには不安が大きかったが、学会理事会の全面的な協力支援を受けたほか、神戸大学の方々からも支援を多大な受けた。とりわけ、神戸大学経済経営研究所の北野重人教授にはプログラム委員長を引き受けていただき、準備段階から当日の運営に至るまで実質的に実行委員長の責務を担っていただいた。この大会が北野教授の尽力なしには終えられなかったことは間違いがなく、主催校としてこの場を借りてあらためてお礼を申し上げたい。

なお大会のオンライン開催は、3 回目となり、翌年の 22 年春の成城大学での大会からはオンライン・対面のハイブリッド開催となったことから、最後の全面的オンライン開催となった。21 年秋には、コロナの毒性の低下などから政府等の旅行支援策などもとられ、人手もある程度は回復。全面的なオンライン開催が適当か判断も迷ったが、オンライン開催を決定した 21 年春の時期にはまだ対面開催には不安も大きかった。またこの間のオンライン講義の普及や、海外学会・セミナーへのオンライン参加も一般化したこと、業者によるオンライン学会運営も習熟したため学会はスムーズに進み全国から多くの参加者を得た。

大会の概要についても、北野教授が書かれた金融ジャーナル 2021 年 12 月号(92～93 頁)の通りであり、全般的な模様はそれを紹介されたい。ここでは中曽宏大和総研理事長（元日本銀行副総裁）の特別講演の模様について述べたい。

中曽氏は、講演中も自己紹介されたが、90 年代後半の日本の金融危機を日本銀行の課長として、2008 年以降の世界金融危機は局長として、まさに第一線で危機対応に当たってきた。2008 年の危機が世界的な危機となったのに対し、1997 年の危機が国際的に伝搬しなかったのは、日本の金融機関の国際的な活動が、米国に比べて相対的に小さいこともあるが、中曽氏を先頭とした日本の金融当局が、文字通り昼夜を徹して欧米等との金融当局と連携を図り対応してきたことが大きい。当時日本の金融機関の国際的な活動も大きく複雑に絡み合った金融取引網を考えれば、日本発の世界金融危機の可能性もあった。

LLR（最後の貸し手）を中心とした中央銀行の信用秩序維持政策は、金融政策に比較して学界の理解もやや劣っているように思える。またその理解もバジヨット原則に留まっている方も少なくない。このため、中曽氏に、自らの経験に基づき、信用秩序維持政策の最新の展開を紹介していただくことは当学会にとっても極めて意義の大きいものであると考え招待した。中曽氏が、多忙な日程の中、オンラインとはいえ講演をしてくれたことは感謝に耐えない。中曽氏の講演「日本銀行—金融危機の経験—」は、その後、22 年 5 月出版の著書「最後の防衛線—危機と日本銀行」（日経 BP 社）の一部となっているので、詳細は譲る。ただ筆者なりに、印象深かったのは、危機対応のなかで LLR 機能が様々に進化したこと

あった。金融政策が、量的緩和政策をはじめ非伝統的な金融政策となったのはよく知られているが、信用秩序維持政策である LLR も、市場機能の回復、外貨の供給、企業金融支援などまさにバジレット原則を超えた非伝統的なものになった。また日本の金融危機対応は、対応が遅く、見通しも甘かったことが批判されるが、中曾氏が、そのような批判を受け入れたうえでも、当時の金融当局のみならず民間金融機関の職員が献身的に対応したことの紹介も印象深かった。中曾氏が、民間金融機関の職員の方々など、危機対応の裏方の必ずしも注目を浴びてこなかった努力について語るときには、氏の情熱も感じられた。これが学会の皆さんにも伝わればと願われ、このことが学会講演で紹介されたことも意義深い講演になったように思う。

(北野重人「学会だより」『月刊金融ジャーナル』2021年7月号,pp92-93より引用)

文責：高橋亘（大阪経済大学、大会準備委員会委員長）